

面

119

# 真 心

池 田 澄 子

去年よりも草臥れますの雲の峰  
めまといや昨夜を昔と思うとき  
その顎は相当怒っている索麵  
大雑把に言えば猛暑や敗戦日  
踏み台に乗り白靴を蔵いけり  
真心は水っぽいかも夕顔垣  
吊忍するべきことはしたくなく  
桃を剥く手を見られて友の家  
白菊黄菊人数分のかなしみの  
書き溜めて夜長つまらぬものばかり

# スマホ撮り

衣 斐 ち づ 子

生きてますあのでこのてとほうれん草  
山里に聞き込み捜査春きざす  
むりやりのおどりぐいとは写楽顔  
推敲の果ての一句や沖繩忌  
マイナンバー廃屋めぐる黒揚羽  
頭から鮎の串焼き食む女  
夫宛にとどく白桃日曜日  
スマホ撮りおがみぐせなる生身魂  
鯛焼きを半分に切る敬老日  
昼下り冬眠の蛇見てしまおう

# 水中花

奥名房子

飼ふごとく水替へてをり水中花  
梅雨前線トーストにジャム厚くして  
緑日の金魚は元気朝支度  
盆参り一人のコメを研ぎて出づ  
ふる里は自転車自転車月見草  
廃屋や柘榴のかつと割るるまま  
酸い顔をして爪たつる夏みかん  
秋の夜の寺堂に落語研究会  
二階より亡き母の声青葉木菟  
夜語りの父の青春春炬燵

# 百物語

岡田一夫

夕河岸や水生きいきと簀を超ゆる  
線香の灰のまま立つ麦の秋  
螢籠字引の傍に置かれたる  
瀧落ちて山迫り上がる心太  
拳骨に毛の生えてゐる団扇かな  
百物語台所へときどきゆく  
母無くて金魚の傍にねまるなり  
笛の衆睫毛に霧を乗せてをり  
老人の頭の中で桃傷む  
いなびかり聖書に絡む栞紐

# 秋の旅人

福 田 葉 子

伯 爵 領 訪 う に 夏 草 深 く し て  
捨 て 船 の 秋 夕 焼 け に 染 ま り いる  
稲 つ る び 天 地 に 深 き 傷 走 る  
戦 前 の 家 二 、 三 軒 路 地 の 秋  
残 る 蚊 を 打 ち て 虚 し き 両 掌 か な  
散 る も の の な べ て 眩 し き 黄 落 期  
風 に な り た き 旅 人 紅 葉 山  
老 人 の 何 か 喚 き て す す き 原  
石 路 の 花 逢 わ ね ば い つ か 遠 い 人  
冬 涛 の 退 く 一 瞬 の 静 寂 か な

# 暗 渠

高 橋 龍

夏みかん世迷言をば書く梵語  
一冊の夏と阿部完市は言ふ  
アオザイへ忍ばせる手も紫黄の忌  
空あります二百十日の駐車場  
磐座に目覚め勝ちなる秋の蛇ひ  
コンテナへ詰込む理屈良夜かな  
末枯や新興俳句暗渠となる  
永遠に悲愴の父は栗を剥く  
枯木中美事な美人現はれる  
特攻もトイレも一步前へ出よ